◎◎◎佳作

太腿に残った傷痕

田原長生
神奈川県・六一・無職

今、白い栗の花が咲いています。

それを見上げながら、お下げ髪のあなたと黙って歩いたあの日のことを、思い出しています。

深まりゆく秋の気配に濡れた山道で、木々の枯葉が彩りを添えていましたね。言葉すくなのあなたにも増して無口な私の心の中では、炎が燃えていました。そのおもいを、言葉とか、態度で表せずに悶々としていました。

あの日は、村祭りの日でしたね。あなたが、私を自分の家へ連れていってくれたのは、相当に勇気の要ることだったと思います。あなたの家では、お父さんと私の恩師であるM先生が酒を酌み交わしていました。勧められてお酒を呑む側で、あなたは甲斐甲斐しく給仕をしてくれましたね。その折にも優柔不断の私は、胸の中を素直に述べることができませんでした。「弥生さんと一緒にさせて下さい」と、一言云うべきでした。たとえ、どんな答えが返ってこようとも、あなたは、その言葉を待っていたのではないでしょうか。

私の家庭内の事情が複雑になり、私は故郷を遠く離れて住む事になりました。人間の心も、その地域を離れると薄れてゆくものとみえて、お互いの便りも、いつしか途絶えてしまいました。いつの日か、あなたが奈須君と結婚したということを妹から聞きました。

奈須君とは柔道を一緒にやった仲間でした。或る日の放課後、今では原因は思い出せませんが、奈須と私の間で何らかの諍(いさか)いがあり、彼が小刀を私の太腿のあたりでチラつかせているので、「突けるものなら、突いてみろ」と怒鳴ったところ、太腿部を突いてしまい、大量の出血に、彼の顔面が蒼白になっていったのを、今でも鮮やかに覚えています。

三日月の形に私の太腿に残った傷痕は、あなたの心の刺(とげ)かも知れないと、栗の花を見ながら考えています。

あれから、もう三〇年余りも経ったのですね。